

夢の話 (その三)

ひげフレディー

もう何年も通っているスーパーのレジに、ちょっと気になるパートのオバサンがいる。歳は僕と同じか少し下か、いや、もしかしたらずっと若いのもかもしれない。薄い髪を後ろで束ね、化粧つ気はない。仕事を終え、古ぼけた2Kのコピーに帰ると、鼻水を垂らした子供たちが、インスタントラーメンの麺をかじりながらテレビを覗いている……。そんな薄暗い光景が自動的に目に浮かんでしまうような、とにかくひたすら地味で幸薄そうな、背の低い女性だ。

今日、そのスーパーに買い物に行くと、肉売り場の脇にワゴンが置かれていた。見るとそれはCDのワゴンセールだった。何の気なしに物色を始めると、そのほとんどはちよつと古めのヒットパレード的なCDだったが、底の方に「T a r a f De H a i d o u k s」のアルバムが1枚だけあった。他のはどれも五百円なのに、それだけ百円の値札が貼られていた。僕は迷う事なくそのCDをカゴに放り込み、レジに向かった。

レジの担当はあのオバサンだった。彼女はいつものように商品のバーコードを読み取っていく。支払いを済ませてレジを立ち去ろうとした時、レジスターに目を落としたままの彼女が、何やらボソボソ独り言を言っている事に気づいた。

「……のCDをそんな値段で売るなんて……」

そう言っているように聞こえた。僕の買ったCDの事を言っているに違いない。一瞬ビクッリして

「あ……あのお、もしかしてタラフがお好きなんですか？」

と、声をかけようかとも思ったが、彼女の背中はその問いを全力で拒んでいるように見えた。

……という夢を見た。

懐かしいなあ…… 小泉今日子だっけ？ いや、中森明菜かも。作曲はたしか高見沢だったよな…… 上半身を捻つて椅子の背もたれに左肘を置いて振り向き、天井のBOSEを見上げながら僕はそんな事を考えていた。ログハウスの屋根裏部屋のような薄暗いレストランだった。

あつ……これはデジャヴだ！

僕は突然気づいた。慌てて正面に向き直すと、案の定テーブルの向かいに二十歳ぐらいの女性が座っていた。僕はもうすぐこの子から別れ話を切り出されるんだ。そして僕らは別れる事になる。咄嗟に右手を伸ばし、彼女の左手を掴んだ。浅黒くて細い腕だった。僕は必死にこの先のシナリオを変えようとしていた。

臭っ！

あまりの匂いに飛び起きた

強烈なオナラをしたか

下手をするとうんこを漏らしたのかも

慌てて嗅ぎまくったが

何も匂わない

……やはり夢だった。

コンサート会場の楽屋のような部屋だった。

部屋の真ん中に置かれた丸いテーブルを囲むように、左斜め前にはティーピーさん、右斜め前にはちんさんが座っていた。二人ともソファアに浅く腰掛け、ひと仕事終えて疲れ切ったような表情だった。その部屋には他にもう一人女性がいたが、彼女は我々の会話に時折参加しつつ、部屋のアチコチをキビキビ歩きながら、後片付けのような作業をしていた。

しばらく与太話が続いたのち、何故かゲームセンターの話題になった。

「ゲームセンターでお金を使うのって好きじゃないんですよ。だって勿体ないじゃないですか」

僕のこの何気ない一言が、二人のレーザービームを起動させてしまった。自分では見えないけれど、彼らから照射された二筋の光が、今まさに僕の眉間で交わり、一つの赤い点を作っているに違いない。

「しまった。地雷踏んじゃった！」

身を躲す間もなく、左右からの猛烈な一斉射撃が始まった。彼らが手にしていたのは、狙撃用ライフルではなくマシンガンだったらしい。僕は蜂の巣状態。そしてその状況は、スットンキョウな表情の大泉洋が部屋に入ってくるまで続いた。

……という夢を見た。

終